パノフスキーの《視覚芸術の意味(Sinn und Deutung in der bildenden Kunst)》の本質意味――そのドイツ語版と英語版における解釈上の問題

江藤匠（東洋大学）

パノフスキーが 1955 年に刊行した論文集『視覚芸術の意味(Meaning in the Visual Arts: Papers in and on Art History)』は、当初よりペーパーバック版で企画された、それまでにない画期的な出版物だった。2 ドル 50 セントという破格の値段で販売されたため、多くの大学で教科書として採用されることになった。パノフスキーは、自身の思想の普及に大いに貢献した本著を「私のドラッグストア本」と呼んでいた。

しかしこの論文集は、翻訳論的にも興味深い点が多々ある。それは掲載された九編の論文の内三編は、ハンブルク時代にパノフスキードイツ語で書いた論考の英訳だからである。具体的には、「様式史の反映としての人体比例論史」(1921 年)、「アルブレヒト・デューラーと古典古代」(1921 年)、「ジョルジョ・ヴァザーリの『リブロ』の第一ページ」(1930 年)の三編だが、従来この英語と独語の二種類の論文の相違点が十分検討されてきたとはいえない。例えば「人体比例理論史」の英語版では、「主観的表出欲求(subjectives Ausdruksbedürfnis)」といったドイツ語特有の言い回しは省かれた。発表者は、こうした英語版における省略や変更は、パノフスキーのアメリカ時代の解釈学の変容を理解する上で重要であると考える。

ところで 1975 年に『視覚芸術の意味』のドイツ語版が刊行されたとき、訳者のヴィルヘルム・ヘックは、総タイトルを「Sinn und Deutung in der bildenden Kunst」に改めた。つまり「意味(Meaning)」という英単語を、「意義と意味(Sinn und Deutung)」という二語一双にしたのである。この変更は、パノフスキーが本来意図していた解釈学の目的を考慮すると、正当的な訳語といえる。本書の第一章「図像学と図像解釈学」において、意味の三層は「自然的主題」、「伝習的主題」、「本質的意味あるいは内容(Intrinsic meaning or content)」として提示された。しかしその理論は、1932 年に『ロゴス』誌に発表された論文「造形芸術作品の記述および内容解釈の問題」では、カール・マンハイムの社会学の方法に則って、「現象意味(Phänomensinn)」、「指示的意味(Bedeutungssinn)」、「本質意味(Wesenssinn)」という造語を用い、意味をすべて「Sinn(意義)」と記載している。つまりパノフスキーは、芸術作品の解釈の最終的目標を「本質意味」の解明としているのであるが、その場合の意味は「Deutung」ではなく「Sinn」なのである。

問題は、「意味(Meaning)」の原語が「Deutung」ではなく「Sinn」であるとするならば、それは何を規定しているのか、「視覚芸術の意味」の意味とは本来何を意図しているのかということである。本発表では、こうしたパノフスキーの英語に転換されたテキスト上の問題点を論じたい。